インドネシア・ジョグジャカルタのウキルサリ村における無形文化遺産バティックの実践と継承に関する研究

Practice and Transmission of Indonesian Batik Intangible Cultural Heritage in Wukirsari Village, Yogyakarta

福田 藍
FUKUDA Ai

1. 序論

(1) 研究の背景と目的

バティック(Batik)とは、溶解したロウで布に文様を描き(ロウ置き)、染色した後にロウを除去(脱ロウ)することで、ロウが置かれていた布面が染色されないまま残り、文様を表すことができるというロウケツ染の工芸技術である。主にインドネシアのジャワ島、マドゥラ島、スマトラ島の一部で継承されてきた。しかしながら、1970 年代頃からロウケツ染によらないプリント技法によるバティック布の生産が本格化し、現在、安価で大量生産が可能なプリント・バティックは市場の 9 割を占めるともいわれ、手仕事による伝統的なバティック業の縮小・衰退を招いている[1]。

バティックは、2009 年に UNESCO の「無形文化遺産の保護に関する条約」における「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載され、その保護が図られることとなった。同条約は、「伝統的舞踊、音楽、演劇、工芸技術、祭礼等の無形文化遺産を消失の危機から保護し、次世代へ伝えていく」[2]ための国際的な枠組みであり、世界遺産条約とともに UNESCO による遺産保護の柱の一つとなっている。一方、国内の遺産保護に関する責任は各締約国に任されており、具体的な保護の措置は各国が実施することとなっている[3]。

インドネシアは、2007 年に同条約を批准し、国内法の整備を行った。2013 年に至り、「無形文化遺産に関する教育文化大臣規定」[4]が制定され、国内の無形文化遺産の申請、記録、指定、保護、活用等について規定された。これにより、2013 年に 77 件、2014 年に 96 件、2015 年に 121 件、2016 年には新たに 150 件がインドネシアの無形文化遺産に指定された[5]。このように指定作業が進む一方で、実質的な保護の体制はいまだ確立していない。同規定の第 11 条には、地方政府が地域の無形文化遺産保護につとめる義務を負うとしたうえで、その保護に関する行動計画を持つことが明記されているが、具体的な行動計画の策定には至っていない[注1)]。

すなわち、インドネシアにおいて、これらの無形文化遺産に対しどのような保護や活用の措置をとっていくかということについては、議論すべき段階にとどまっており、具体的な視点構築が課題となっている。

そこで、本研究では、バティックを対象として、担い手によるバティックの実践と継承の実態を明らかにしたうえで、その実践と継承を可能としている仕組みを明らかにする。そのうえで、無形文化遺産バティックの保護において必要とされる視点について考察することを目的とする。

(2) 研究対象地

本研究の対象地は、インドネシアのジャワ島中部南岸に位置するジョグジャカルタ特別州である。ジョグジャカルタは、王宮を中心として独自の文化を築いてきたインドネシアの古都であり、王宮が所在し州都でもあるジョグジャカルタ市と、郊外の農村部である 4 つの県から成る(図 1)。

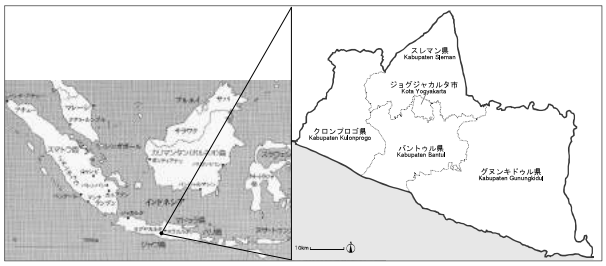

図 1　ジョグジャカルタ全図[6]

2. ジョグジャカルタにおけるバティックの実践と継承の場

第 2 章では、文献調査からジョグジャカルタにおけるバティックの歴史文化的変遷を整理し、その文化的特徴を把握した。そのうえで、バティックの実践状況について実地調査を行い、現在のジョグジャカルタにおいて伝統的なバティックが実践・継承されている場を明らかにした。

(1) ジョグジャカルタにおけるバティックの特徴

ジョグジャカルタにおけるバティックは、王宮を中心に王宮文化の一つとして発展してきた。チャンティンと呼ばれる道具を用いた手描きのロウ置き技法と王

宮を象徴する古典文様にその特徴が見出される(図 2)(図3)。また、バティックは本来、王宮内の伝統的な価値観や慣習とむすびつき、主に王侯貴族の子女によって実践されるものであった[7]。時代が下るにしたがって、王宮から王宮周辺へ、さらに一般社会へとその実践が拡大したが、その過程においても、王宮を中心とする地域はジョグジャカルタのバティックの実践・継承においてなお重要な地域であった(図4)。

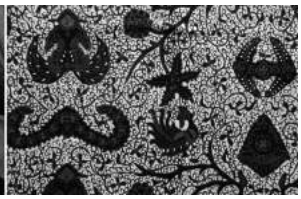

図2 チャンティンを用いたロウ置き　図3 古典文様

(2) ジョグジャカルタにおけるバティックの現状

現在も王宮を中心とする地域の一部では、バティックの実践が行われている。王宮敷地内で唯一バティックの実践を行う生産組織では、王宮で使用するバティック布の制作をはじめとする伝統的な手法によるバティックが行われている(図5)。一方で、所属する担い手は、10 人中 9 人が郊外の農村部出身の職人であり、出身地の農村で技術を習得していることが把握された。

また、王宮環境内に位置するバティック産地のパテハン村タマンサリ集落では、現代的な絵画バティックの制作や観光客向けのワークショップの実施が主流となっている(図6)。かつては大勢いた伝統的なバティック布を制作する職人の減少により、集落内の問屋や小売業者は、郊外の農村部のバティック産地に伝統的なバティック布の供給を頼っていることが把握された。

さらに、ジョグジャカルタ特別州政府商工局による 2015 年の中小産業に関する統計から、バティック産地の分布と生産者数について整理した結果、産地は王宮所在地のジョグジャカルタ市内よりも郊外の農村部に多く分布し、生産者の数も多いことが把握された(表 1)。

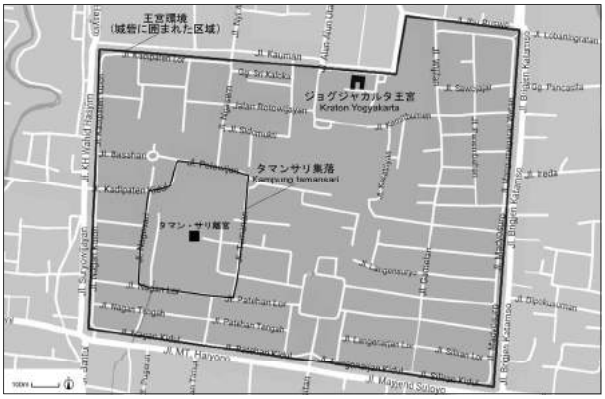

図4　ジョグジャカルタ王宮周辺図（Google Map より作成）

図5 王宮敷地内のバティックの様子　図6 タマンサリ集落のバティックの様子

表 1　ジョグジャカルタにおけるバティック産地の分布と生産者数[8]

市/県 kota/kabupaten	産地の名称 nama sentra	通り jalan	村/町 desa/kelurahan	郡 kecamatan	労働者(人) tenaga kerja (orang)
ジョグジャカルタ市 (kota Yogyakarta)	絵画バティック (batik painting)	タマンKT Ⅰ/448 (Taman KT Ⅰ/448)	パテハン(Patehan)	クラトン(Kraton)	44
				計	44
スレマン県 (kabupaten Sleman)	該当なし（※スレマン県にもバティック生産業は存在するものの面的な広がりを持った産地ではないため統計に含まれていない）				
バントゥル県 (kabupaten Bantul)	バティック(batik)	―	ウキルサリ(Wukirsari)	イモギリ(Imogiri)	623
	バティック(batik)	―	ウィジレジョ(Wijirejo)	パンダック(Pandak)	174
				計	797
クロンプロゴ県 (kabupaten Kulonprogo)	バティック(batik)	クボンダレム(Kabondalem)	クルール(Kulur)	テモン(Temon)	174
	バティック(batik)	サポン(Sapon)	シドレジョ(Sidorejo)	ルンダ(Lendah)	158
	バティック(batik)	スンブンガン(Sembungan)	グルレジョ(Gulurejo)	ルンダ(Lendah)	148
				計	480
グヌンキドゥル県 (kabupaten Gunungkidul)	バティック(batik)	スンダンレジョ(Sendangrejo)	タンチェップ(Tancep)	ンガウェン(Ngawen)	25
	バティック(batik)	スンブラン(Sumberan)	タンチェップ(Tancep)	ンガウェン(Ngawen)	65
	バティック(batik)	トレンボノ(Trembono)	トウガルレジョ(Tegalrejo)	グダンサリ(Gedangsari)	44
				計	134

(3) 小括

以上の結果から、現在のジョグジャカルタにおけるバティックの実践および継承の場としては、郊外の農村部におけるバティック産地が重要な役割を担っているということを指摘した。

3. ウキルサリ村におけるバティックの実践と継承の実態

第 3 章では、ジョグジャカルタ郊外の農村部におけるバティック産地のなかでも、生産者数が極めて多いバントゥル県ウキルサリ村を対象地としてフィールドワークによる事例研究を行い、同地域におけるバティックの実践・継承の実態を明らかにした。

まず、ウキルサリ村のバティックの変遷について把握し、同地域の担い手によって受け継がれてきたバティックの要素を特定した。そのうえで、実際にどのように実践・継承が行われてきているのか、その方法と特徴について明らかにした。

(1) 対象地および調査の概要

ウキルサリ村(desa Wukirsari)は、ジョグジャカルタ特別州バントゥル県イモギリ郡に所属する 8 つの行政村の一つで、16 の集落から成る。ジョグジャカルタ市内から南東約13km に位置し、面積約15km^2、人口 16,847 人を有している[9]。村南部の丘陵地の頂上付近には、ジョグジャカルタ王家およびスラカルタ王家の歴代の王と王族がまつられる墓石群が存在する。

ウキルサリ村において、特にバティックが盛んに行われているのは、カランクロン集落(dusun Karangkulon)、ギリロヨ集落(dusun Giriloyo)、チェンケハン集落(dusun Cengkehan)一帯である。主に住民の女性たちによってバティックが実践・継承されてきており、現在、16 の小規模なバティック生産組織が確認できる。

本研究では、上記 3 集落にまたがる地域一帯を調査対象地域とし(図 7)、13 のバティック生産組織[注2]および個々の職人を対象に、ヒアリング調査、アンケート調査、参与観察を行った（表 4)。実地調査は 2015 年 4 月から 2016 年 2 月にかけてのインドネシア滞在期間中に随時行い、2016 年 8 月に追加調査を実施した。

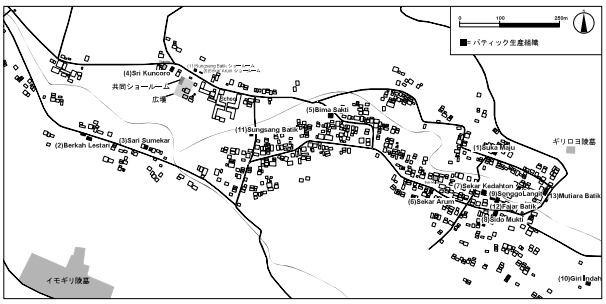

図 7　調査対象地（筆者調査による作成）

(2) ウキルサリ村におけるバティックの変遷

ウキルサリ村におけるバティックの起源は明らかとなっていないが、現地では王家の陵墓が造営された 17 世紀中葉であると伝えられている。陵墓の守衛を職分とする王宮使用人の家族によってバティックが開始され、当初は王宮の需要を満たすための制作が行われたとされる[10]。徐々に一般住民にバティックの実践が拡大すると、村外の問屋・商人から原材料を前借りし、個々の家でバティックのロウ置き作業のみを行い、賃金を受け取るという問屋制家内工業体制が確立していった。その後、2006 年のジャワ島中部地震からの復興過程においてバティック業の活性化が試みられた結果、バティック生産組織の設立が相次いだ。これらの生産組織は基本的に住民である職人によって構成され、それまでの問屋・商人に代わり、村内のバティック生産の全工程および流通を主体的に担うようになっている。

このように、ウキルサリ村においては、王宮体制、問屋制家内工業体制、バティック生産組織体制へと、職人のバティックの実践をとりまく環境が変化してきた。一方、それぞれの生産体制におけるバティックの作業工程と担い手に着目すると、ウキルサリ村の職人によって一貫して実践されてきたのはロウ置きの工程であることが分かる(表 2)。

表 2　バティックの担い手と作業工程の変化

			王宮体制		問屋制家内工業体制		バティック生産組織体制	
			担い手	場所	担い手	場所	担い手	場所
バティック生産流通工程		①原材料の調達	―不明	―不明	問屋・商人	村外	バティック生産組織（＝ウキルサリ村職人）	村外
	制作工程	②ロウ置き	ウキルサリ村職人（王宮関係者）	ウキルサリ村	ウキルサリ村職人	ウキルサリ村	ウキルサリ村職人	ウキルサリ村
		③染色	―不明	―不明	問屋・商人と取引きのある村外の工房あるいは職人	村外	バティック生産組織（＝ウキルサリ村職人）	ウキルサリ村
		④脱ロウ	―不明	―不明	問屋・商人と取引きのある村外の工房あるいは職人	村外	バティック生産組織（＝ウキルサリ村職人）	ウキルサリ村
	⑤販売		―不明	―不明	問屋・商人	村外	バティック生産組織（＝ウキルサリ村職人）	ウキルサリ村

(3) 古典文様とロウ置き技術の継承方法とその特徴

ロウ置きの工程に関して、具体的な要素としては、古典文様とチャンティンを用いる手描きのロウ置き技術が受け継がれてきている。このうち、古典文様は、型紙として個々の職人の家に代々受け継がれてきたものであるが、秘伝的な要素はなく、職人間での貸し借りが日常的に行われている(図 10)。古典文様は、社会的に共有されながら個々の家の枠を超えて、担い手のコミュニティ全体に継承されてきたものであるといえる。

また、ロウ置き技術は、母親などの身近な実践者の観察を通して自ら実践を繰り返すなかで身体的に習得されるものであることが把握された(表 3)。ロウ置きの工程は、基本的に分業によって行われるが、個々の職人はそれぞれの家を核として、ときには道端で数人が集まってロウ置き作業を行っている。作業の日数や時間などは個人の裁量に委ねられており、家事や育児、農作業の合間に行われることで、その実践が観察できる環境で過ごす子どもたちは、身近な人がロウ置きを実践する過程でその技を学び取っている。実際に、家でロウ置き作業を行う母親の隣で遊びの延長としてロウで絵を描く子どもの姿や、手伝いの一環として学校から帰宅した少女がロウ置き作業を行う様子がみられた(図 8)（図 9)。このようなロウ置き技術の継承は、教える／教えられるといった特別な関係性やシステムに依拠するものではなく、日常のなかに埋め込まれた行為として、その実践の過程において継承が可能になっているといえる。

表 3　職人を対象としたロウ置き技術の習得に関するアンケート結果

質問項目		回答実例	回答者数（合計51人）	割合
①	どのようにバティックのロウ置き技術を習得したか	(1)見よう見まねで自分自身で試してみるうちに習得した	38人	74.5パーセント
		(2)自分自身で学び取った	11人	21.5パーセント
		(3)その他	2人	4パーセント
質問項目		回答実例	回答者数（合計38人）	割合
②	誰を見まねたのか	(1)母	31人	82パーセント
		(2)祖母	5人	13パーセント
		(3)母、近所の人	1人	2.5パーセント
		(4)母、その他	1人	2.5パーセント

※ウキルサリ村のバティック職人51名に対して質問①を行い、回答(1)と答えた職人38名に対して質問②を行った

図 8(左上)図 9(左下)　親子でロウ置き作業を行う様子

図 10(右)　古典文様の型紙

(4) 小括

以上より、職人間でのバティックの知識や技術は、社会的に共有されながら、職人がバティックを実践する過程において継承されていることが明らかとなった。職人間でのバティックの継承が実践の過程において可能となるという結果を踏まえると、実践活動を存続させることが継承のために重要な点であるといえる。

4. ウキルサリ村におけるバティックの実践と継承を可能としている仕組み

第 4 章では、第 3 章の結果を踏まえ、職人による実践活動の存続を可能としている仕組みの解明を試みた。

特に、2006 年の震災前に衰退していたウキルサリ村の職人のバティックの実践活動が、震災後から現在にかけて再活性化しているという状況の変化に着目して、その変化の内容を把握した。さらに、現在同地域においてバティックの生産流通を主体的に担っている生産組織の活動と役割を明らかにすることで、職人のバティックの実践活動を支える仕組みを明らかにした。

(1) 職人のバティックの実践をとりまく状況の変化

震災前は、問屋制家内工業体制における村外の問屋・商人との雇用関係のもとで、職人はバティック労働者としてその実践にたずさわっていた。当時の状況として、オーナーである問屋・商人から十分なバティックの仕事や賃金が得られないといった経済的な事由に起因して職人の実践活動が衰退していたということが把握された。このことは、たとえ職人がバティックの技術を保持している状態であっても、それを実践することができない状況が起こりうること、そして、単に技術が継承されさえすればバティックの実践が可能となるのではないことを示している。

一方、震災後は、村内にバティック生産組織が成立し、職人が組織化され、バティックの生産流通を主体的に担うようになったことで、職人の実践活動をとりまく環境も大きく変化した。

(2) バティック生産組織の活動の特色と役割

バティック生産組織は、バティック生産の全工程および流通を一体的に担っている。生産組織は、職人に原材料と仕事を提供し、職人が個々の家に持ち帰ってロウ置き作業を行った布を買い取り、工房で染色・脱ロウの工程を実施する。完成したバティック布は、生産組織のショールームや村の共同ショールームなどで販売される。

現在、受注生産の割合が半数ないし半数以下である生産組織は 13 組織中 10 組織であり、ショールームでの販売が可能であることによって新たな生産機会の創出にもつながっていることがうかがえる。販売の工程を村内で自ら担うことができるようになったことは、それまでの問屋・商人との雇用関係に依存しないバティックの実践を可能にするとともに、ロウ置き作業の賃金の支払いに加えた職人への利益の還元を可能にしている。例えば、生産組織によっては年間の純利益が所属メンバーに分配される仕組みがある。このように、生産組織がバティックの生産から流通までを一体的に担い、生産体制に加えて販売体制も構築していることは、結果として職人の実践が生業として成り立つ仕組みとして機能していると考えられる。

また、バティック生産組織の特徴として、互助活動の実施があげられる。13 組織中 9 組織において寄合およびアリサン(arisan)が行われている。アリサンとは、

表 4　ウキルサリ村のバティック生産組織へのヒアリング調査結果

	バティック生産組織												
組織形態	協同組合 (Koperasi)	バティックグループ (Kelompok Batik)									個人零細企業 (Usaha Sendiri)		
通し番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
組織名称	Suka Maju	Berkah Lestari	Sari Sumekar	Sri Kuncoro	Bima Sakti	Sekar Arum	Sekar Kedhaton	Sido Mukti	Songgo Langit	Giri Indah	Sungsang Batik	Fajar Batik	Mutiara Batik
所在地(集落)	チェンケハン	カランクロン	カランクロン	カランクロン	カランクロン	ギリロヨ	ギリロヨ	ギリロヨ	ギリロヨ	チェンケハン	カランクロン	ギリロヨ	チェンケハン
設立年	2004年 2008年から協同組合	2007年	2007年	2008年	1982年	2007年	2008年	2008年	2010年	2009年	2007年	2011年	2012年
メンバー数	91人	50人	23人	20人	30人	30人	25人	26人	12人	20人	30人	約20人	8人
会費(一人当たり/月)	Rp.5.000	Rp.1.000	Rp. 5.000	無	無	無	無	無	Rp.10.000	Rp.3.000	—	—	—
会費の用途	シンパン・ピンジャム	シンパン・ピンジャム	シンパン・ピンジャム 年に一度の分配金	—	—	—	—	—	シンパン・ピンジャム	原材料費	—	—	—
設備 ①ロウ置き作業場 ※ロウ置き作業場が所有されているがほぼ使用されていない場合を(○)と表記 ②染色と脱ロウの設備 ③販売用ショールーム	(①)②③	①②③	(①)②③	①②③	②(③代表者自宅)	(①)②③	(①)② (③代表者自宅)	①②③	無 (染色と脱ロウ:Fajar Batikで実施/販売:Sri Kuncoroに委託)	(①)②③	①②③	(①)②③	②③
染色作業の頻度	10枚の布が集まり次第	約週に一回 (注文量による)	注文により随時	約週に一、二回 (5-10枚の布が集まり次第)	約2ヶ月に一回	約1ヶ月に一回	約1ヶ月に一回	約1ヶ月に一回	約1ヶ月に一回	10枚の布が集まり次第	ほぼ毎日	約1週間～1ヶ月に一回 (7-8枚の布が集まり次第)	約1ヶ月に一回 (10枚の布が集まり次第)
脱ロウ作業の頻度	染色時	染色時	染色時	染色時	染色時	染色時	染色時	染色時	染色時	染色時	週に一回	染色時	染色時
注文生産の割合	半数以下 (10パーセント)	半数以上 (60パーセント)	半数以上 (70パーセント)	半数以下 (25パーセント)	無	半数以上	半数	半数以下	無	半数以下 (5-10パーセント)	半数以下 (35パーセント)	半数以下 (10パーセント)	半数以下 (10パーセント)
古典文様の生産の割合	半数以上	半数以上	半数以上	半数以上	100パーセント	半数以上	半数	半数以下	半数以上	半数	半数以下	半数以上	半数
バティック布生産におけるモチーフの決定者	職人個人 (在庫状況によっては代表が決定する)	グループ	職人個人	グループ	代表	代表 (他人に委託されるものを除く)	代表	デザイン担当のメンバー	代表	代表 職人個人	代表	代表	代表
複数の生産組織に所属しているメンバー	約60パーセント (約30人)	約15パーセント	約65パーセント (15人)	約15パーセント (3人)	約27パーセント (約8人)	約17パーセント (約5人)	無	約19パーセント (約5人)	約17パーセント (2人)	約90パーセント (18人)	無	約50パーセント (約10人)	100パーセント
バティック以外の活動 (寄合およびアリサン)	(有) (月に一回) (協同組合の総会 (年に一回))	(有) (月に一回)	(有) (月に一回)	年に一回の集会のみ実施	(有) (月に一回)	(有) (35日に一回)	(有) (半月に一回)	(有) (二週間に一回)	(有) (月に一回)	(有) (月に一回)	寄合を伴わないアリサンのみ実施	無	無
バティック以外の活動 (シンパン・ピンジャム)	(有)	(有)	(有)	無	(シンパン・ピンジャムはないが利益から借入れ可能)	無	無	(有)	(有)	無	無	無	無

概ね日本の無尽や頼母子に相当し、メンバーが一定の積立金を持ち寄り、くじなどで選ばれた人が全員分の現金を受領し、順番が一巡する間にすべてのメンバーが一度は受領することができるという活動である。単なる資金調達の手段というばかりでなく、人々が集う機会を提供し、参加する人々の親睦や娯楽的な側面も有している[11](図 11)（図 12)。また、5 組織で実施されているシンパン・ピンジャム(simpan-pinjam)は、個人の出資金やグループ内の利益の一部などから集められた資金を、メンバーが定額の利子を支払って借用することができるインフォーマルな預金・貸付信用システムである。これらの活動によって得た資金は、バティックに関連する活動というよりは、生活費を補うものとして、また不時の出費に使われるものである[注3)]。

このようなアリサンやシンパン・ピンジャムの活動は、単に経済的な機能を担っているだけではなく、ゴトン・ロヨン(Gotong Royong)と呼ばれるインドネシアの伝統的な相互扶助慣行の実践の一例として、コミュニティの調和形成にも機能していることが指摘されている[12]。また、職人へのヒアリングを通して、このような互助活動に参加できることが、生産組織に所属しながらバティックの実践にたずさわる主要な動機の一つになっているということも確認された。

図 11(左)図 12(右)　アリサンおよび寄合の様子

寄合や互助活動をはじめとする生産組織の活動を通じた職人同士の交流が可能になっていることは、職人から聞かれた(生産組織が成立する以前と比較して)「職人同士でバティックの話をする機会が増えた」「職人が一緒に行う活動が増えた」「職人同士のつながりが強くなったと感じる」という言葉にも表れている。実際に、村の共同ショールームでの店番やバティックの共同制作などの活動を通じて職人同士の交流が生まれている。また、生産組織同士では、委託販売や仕事のシェアなどが行われており、個々の生産組織の独立性よりも協働関係に特徴が見出される。さらに、職人は生産組織を比較的自由に移動し、複数の生産組織に所属することや、特定の生産組織への所属の有無にかかわらず生産組織を主体とするバティックの実践に参加している。このように生産組織と職人の境界はあいまいで、こうした生産組織のあり方が、担い手同士の交流を生み、ゆるやかなつながりの形成を可能にしていると考えられる。

(3) 小括

バティック生産組織は、個々の職人に対する仕事の機会の創出、原材料や仕事の提供をはじめとする生産体制および販売体制の構築という役割を担っており、職人がバティックを生業として実践できる仕組みとして機能している側面が明らかとなった。また、生産組織単位で実施されている互助活動を通して、職人の生活を支えうる基盤が提供されているだけでなく、本来経済的機能を目的とするアリサンやシンパン・ピンジャムの実施によって職人同士の関係が強化されていることが示唆された。加えて、職人とのゆるやかなむすびつきを基盤とした生産組織のあり方が、担い手同士の交流を生み、関係構築や関係強化にもつながっている側面が明らかとなった。

5. 結論

(1) まとめと考察

本研究では、ジョグジャカルタにおける伝統的なバティックの実践・継承の場として、郊外の農村部の役割を指摘したうえで、その事例としてウキルサリ村を取り上げた。まず、ウキルサリ村の職人のあいだで行われてきたバティックの実践・継承の実態を明らかにし、技術の継承が実践の過程で可能となることから、職人の実践活動を存続するということがバティックの継承において重要な点であることを指摘した。次に、職人の実践活動の存続を可能としている仕組みについてバティック生産組織の役割の把握を通して明らかにした。その結果、生産組織の活動は、職人のバティックの実践活動を支えうる基盤を構築していることが明らかとなった。以上を踏まえると、生産組織が担う役割から抽出される条件は、無形文化遺産バティックの実践と継承のための視点となりうると考えられる。以下、その視点についての考察を示す。

(ｉ) 担い手のコミュニティ内における継承環境の共有

バティックの知識や技術に関する継承環境は、ウキルサリ村の担い手のコミュニティ内で共有されている。古典文様は、その型紙が個々の家の枠を超えて社会的に共有されながら継承されている。また、ロウ置き技術は、日常生活のなかに埋め込まれた行為として、個々の職人の家や道端などひらかれた場所で行われることにより、村のいたるところでその実践が観察できる環境が成立し、後継者となる子どもたちは身近な実践者を観察することを通して身体的に技術を習得している。

以上から、バティックの継承においては、一家相伝のような個人や家の単位ではなく、コミュニティの単位でその継承関係が共有されうる環境が重要であるといえる。具体的な保護施策の構築にあたっても個人単位ではなくコミュニティ単位での実践活動の存続を基本的な視点とした保護のあり方が求められると考える。

（ii）担い手のバティック実践活動の生業化

バティックの継承がその実践の過程で可能となっているということを踏まえると、継承において、実践活動を存続させることが重要であるといえる。ウキルサリ村では、経済的事由に起因して職人のバティックの実践活動の衰退を経験していた。このことは、たとえ職人がバティックの知識や技術を保持していたとしても、それを実践しうる十分な基盤がなければ実践は立ちゆかなくなり、結果として継承ができなくなる事態が起こりうることを示している。

以上から、職人がバティックの実践活動を存続するうえでは、職人にとってバティックの実践が生業として成立することが重要な条件の一つであるといえる。このことは、技術継承がその実践の過程において行われていることを踏まえると、バティックの知識や技術の継承とも決して無関係ではないことから、無形文化遺産保護の文脈で議論すべき課題であると考える。また、バティックをはじめとする伝統工芸が市場経済との関係性のなかで発展してきた伝統産業としての側面を少なからず有していることからも、無形文化遺産のなかでも特に伝統工芸の分野においては、その保護を志向するにあたって議論されなければならない視点であると考える。

（iii）担い手同士の関係構築などの実益を超えた意味や価値の付与

バティックが生業として成り立つということも職人がバティックの実践を存続するうえで重要な条件であることを指摘した。一方で、市場経済の一部としてバティックの実践が根付くことは、さまざまな要因によって販路が断たれてしまった場合などにその衰退を招きかねないという脆弱性を孕んでいるともいえる。このことは、ウキルサリ村における問屋制家内工業体制が市場経済的な要因によって立ちゆかなくなり、その結果、職人の実践活動の衰退という状況に直面したことからも明らかである。

ウキルサリ村においては、担い手同士のゆるやかなつながりを基盤とする生産組織のあり方や、生産組織単位で実施されている互助活動を通して、職人の生活を支えうる経済的な機能のみならず、担い手同士の関係構築や関係強化という側面が確認された。バティックの実践活動を通して、個々の職人や担い手のコミュニティの文脈においてこういった実益を超えた意味や価値を付与していくということは、担い手のコミュニティにおいてバティックの継承関係が共有されうる良好な環境を構築し、担い手のコミュニティ自身がバティックの実践活動を存続できるようにしていくうえで重要な視点の一つであると考える。

(2) 結語

無形文化遺産の保護を志向するにあたっては、個々の無形文化遺産の性質や置かれた状況によって柔軟に対応すべきであると考えるが、少なくともバティックのように担い手の生活に根ざして実践・継承が行われてきた無形文化遺産に関しては、単に技術を継承することや、物理的な実践活動、伝統の意識のみでは、担い手による実践活動を存続することは難しいと考える。

本研究では、バティックの事例から、担い手のコミュニティ自身が当該無形文化遺産の文化的特徴を認識したうえで、「継承環境を担い手のコミュニティ内で共有すること」「担い手の実践活動が生業として成り立つこと」「担い手のコミュニティにおける担い手同士の関係構築など、実益を超えた意味をその実践・継承活動に付与すること」が、担い手による実践活動および継承活動を存続する、すなわち無形文化遺産を保護していくうえで重要な視点であることを示した。

（注および参考文献）

注1) ジョグジャカルタ特別州政府文化局におけるヒアリングより（2014 年 9 月, 2016 年 8 月）

注2) ウキルサリ村の調査対象地におけるバティック生産組織は、2015 年 6 月時点で 16 組織が確認されたが、本研究では、活動停止中、本格的な活動を開始していない、常連客からの注文時に生産活動を行うのみ、という状況の 3 組織を除く 13 組織を対象とした。

注3) シンパン・ピンジャムを利用して借用した資金を出資金とし、新たなバティック生産組織を設立した例も確認される。

1 関本照夫：周縁化される伝統-バティックから見るジャワの近代-, 民族學研究, p.268, 2000.

2 外務省ホームページ〈http://www.mofa.go.jp/mofaj〉2016 年 12 月

3 無形文化遺産保護条約（政府仮訳）第 11 条, 第 12 条

4 Peraturan Menteri Pendidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia Nomor 106 Tahun 2013 tentang Warisan Budaya Takbenda

5 インドネシア教育文化省ホームページ〈http://www.kemdikbud.go.id〉2016 年 12 月

6 吉本忍：ジャワ更紗, 平凡社, p.178, 1996.（筆者加筆）

7 Clifford Geertz：*The Religion of Java*, The University Chicago Press, p.287, 1960.

8 Program Pnembuhan Dan Pengembangan IKM Satker Dinas Perindustrian Perdagangan Koperasi & UKM Daerah Istimewa Yogyakarta Tahun Anggaran 2015：Buku Daftar Sentra IKM

9 Kantor Pemerintah Desa Wukirsari：Buku Monografi Desa Keadaan Pada Bulan Desember Tahun 2014

10 Sumintarsih：Pembatik Girilaya Desa Wukirsari Imogiri, *Buletin Jarahnitra*, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Direktorat Jenderal Kebudayaan Balai Kajian Sejarah dan Nilai Tradisional Yogyakarta, p.8, 1990.

11 鳴海邦碩, アルディ P.バリミン, 田原直樹：神々と生きる村 王宮の都市, 学芸出版社, p.229, 1993.

12 Clifford Geertz：The Rotating Credit Association: A “Middle Rung” in Development, *Economic Development and Cultural Change*, The University of Chicago Press, Vol.10, No.3, p.243, 1962.